

狂歌を弁護して

ルイービン・ヴィークトル(V・V・Rybin)

サンクト・ペテルブルグ国立大学

今度は、私の発表のテーマの選択の切っ掛けになったのは少なくとも二つぐらいだ。まず、私は割合に昔から故ピーヌス (Pinus E.M.) 先生(1914-1984)から当時(1983年)亡くなったバービンツェフ(Babintsev A.A.) (1920-1983)先生の代わりに文語体を教えることが言いつけられたのだ。

私は経験のない、知識もあまりなかった者で、色々な教え方、いわば教授法を探って、捜し求めているとき、それさえでも頭を悩ませていた。手元には教材、教科書など何もなかったからだ。本当に文語という不案内な“土地”を踏んだかのような感じがした。様々な工夫を試した結果、学生時代にほとんど教わられていなかった万葉集、古今和歌集からの短歌をもとにして文語を教え始めた。小倉百人一首も広く使うようになったのもあたりまえではないだろうか。短歌だけでも文語体のほとんどの文法も説明できるに違いないと分かったのだ。

『古事記』の研究者であった故ピーヌス先生は私の”教授法“の選択に賛成してくれて、それを承認された。

一方、次第に、日本の狂歌も私の興味を引き起こした。『日文研』のおかげで私は有名な喜多川歌麿と密接な関係がある絵本『狂歌合はせ』の研究もできたことに對してこの機会を利用してあらためて感謝の意を表させていただけることは嬉しく思っている。

早速、発表の本題に入ろう。

『広辞苑』の“狂歌”という単語の解釈に次のように書いてある。〔狂歌〕：諧謔・滑稽な感想を詠んだ短歌。万葉集の戲咲(ぎしょう)歌、古今集の俳諧歌の系統をおそうもので、平安・鎌倉・室町時代にも行われ、特に江戸中期以後に流行、俗語を用いたと¹。偶に”狂歌”とはユーモアのあるたわむれに作られた戯作に属する詩文のジャンルのことも言う。狂歌集には替え歌、もじり歌、パロディーが多い。

日本文学の歴史において長年にわたってどんな時代であってももじり詩文が作成された。たとえば、十八世紀の後半には、伝統的な、従来の「歌合はせ」(文学的遊戯)をもじることは流行っていた。当時の狂歌の中で『画本虫撰』(1788)と『百千鳥狂歌合はせ』(1790)が目立っている。加えて、その詩集、それぞれに有名な絵描き喜多川歌麿が絵を添えたこともあまり知られていないと思う。

『虫撰』²から二・三の例を取り上げよう。

1 蝶 稀年成

ここの間は
蝶とも忙しく
吸てみむ
恋しき人の
花の口唇

この短歌も歌麿の絵も蝶がけしの花にとまろうとする瞬間を描いている。

2 蜻蛉 一富士二鷹

人ごころ
秋津虫とも
ならばなれ
離しはやらじ
鳥もちの竿

(2)には蝶と蜻蛉の歌について次のように書いてある。「いずれも虫に寄せて恋心を陳ぶる狂歌である。古歌を踏まえた秀歌である」と。

3 蜂 尻焼猿人

こわごわに
とる蜂の巢の
穴にえや
うまし乙女を
蜜の味わい

蜂の狂歌には乙女との恋愛がうまい蜂蜜の味に喩えられている。色っぽい意味ももっているのではないか。

1, 2, 3にあげた狂歌は虫たちの恋愛関係に因んで作られている。誰でもわかっているようにこのような和歌(狂歌)には人間関係(いわば恋愛関係)が比喩的に賛美されている。大雑把にいえば、このような関係を巧みに詠み込んで描写する歌の傑作と見なされることができただろう。ここにあげた狂歌は本当に卑俗な短歌であろうか。私はそう思わない。

私の意見と違う狂歌に対する観点もあると言うまでもない。その一つをあげよう。「浮世絵が市井の町絵師によって描かれているように、川柳、狂歌もまた江戸の庶民文化が生んだ文芸である。古典の詩歌のように優雅なおもむきも、物のあわれの抒情性の美しさもないが、古典詩歌には詠じられなかった軽妙洒脱さ、パロディ、ユーモア、奇想性など世俗性が詩歌の中に織りこまれている。わけても画中の狂歌は天明狂歌連の逸材がそろって参加した秀句をもって飾られている。狂歌の全盛期は川柳と同様に天明期であって、江戸文芸の所産であり、江戸文化がいかに豊饒であったかを語っている。狂歌も浮世絵の春画と同様に戯画化(カリカチュアライズ)された詩歌であり、自由な精神の息吹きであった」³。

以上の三句(三首)は狂歌らしいユーモアたっぷりの絶句であろうか。ユーモアとは間違いなく国民性を表明していることといっても過言ではないだろう。ロシア人の観点から見るとこのような詩文はユーモラスなのではなかろう。若しかして私はユーモアのない人ではないかと思える人もいるかもしれない。専らそうではないと私自身自身が思うのだ。私の考えでは以上の三句とも(『虫選』にはもっともっとあるけど)ある原作の詩文に匹敵できるような傑作ではないかと私には思えるぐらいだ。

上に上げた詩文の例はリリカルな叙情詩だと間違いはない。色っぽい、エロチックな示唆も含んでいるかも知れない。

引き続いて、ちょっと主題から脱線、逸脱して、歌麿の『絵本百千鳥狂歌合は

せ』についての話に移ろう。

では、『百千鳥』とは何かということについてのお話に入ろう。

これは、寛政二年（1790）頃に開板された、狂歌合せ大本前後編からなる二冊本だ。ただし本書は、正確な刊行年が不明で、寛政前後と推定されている⁴。

本書には、前編に七図、後編に八図が収められ、一図に二種の鳥が描かれる構図であり、まるで鳥たちが対話をしているかのような印象を持つ。絵本『百千鳥』は、「図柄も面白く『虫撰』とは別趣のダイナミックな趣がある。羽毛表現に空摺を用いたり、細線による毛描にデリケートな変化をつけた色摺りを重ねるといった具合に、技法的にも絶品というよい工夫が凝らされている。狂歌もなかなか楽しく[中略]ウィットに富んでいる」との評価もある⁵。安村敏伸は加えて、この素晴らしい仕事を、『虫撰』に次ぐ傑作としている。

歌麿は鳥類の生態をうまく捉えている。けれども彼の捉え方は、鳥類学者のそれとは全く違う。歌麿は、心をこめて丁寧に自然界を描写している。自然を綿密に観察し、動植物たちを念入り眺めた結果、彼の卓越した写生手腕を発揮して、このような作品を生み出すことが出来るようになったと思う。見る者に、自然への親密感と愛着心を与えてくれるようだ。

前述のように、この絵本は前後からなる二冊大本で、折り畳み式になっている。では、この中からいくつか取り上げて分析してみよう。

鳩 園故蝶

鳩の杖
つくまでいろは
かはらじな
たがひに年の
まめはくふとも

鳩という鳥は平和の象徴だけでなく、恋人同士とか夫婦のシンボルでもある。「杖」は「便りとするもの」の喩えだ。この一首は擬人化により、人間の一生に渡って続く愛情が見事に表現されている。「色」と「杖」にかかる「つくまで」の表現が二重の意味で使われ、二人の愛情の信頼性と強さを強調する。「互ひに年の豆は食ふとも」の句は、実に日本らしい立派な言い回しであろう。長年に渡る男女の愛を賛美する一首だ。

鶯 則有遊

のきちかく
ほほうとつぐる
一声は
我が恋仲を
みたかうぐひす

まず、この狂歌の題名である鳥の名は、その鳴き声「ウグヒス」（昔の人はこのように聞き留めたかもしれない）に由来すると強調したいのだ。第二に、「ほほう」はびっくりした感情を表わす擬音語で、今も使われている「ホーホケキョ」（鶯の鳴き声）に似ている。第三に、疑問の「みたか」と「鶯」の逆語順もとてもいい技法であって、鳥との会話のような印象を与えてくれ、この場面の臨場感も生

み出されていると思われるだろう。

雲雀

銭屋金持

大空に
おもひあがれる
ひばりさへ
ゆうべは落つる
ならひこそあれ

この狂歌はウィットに溢れているのではないだろうか。擬人化の用法により鳥の生態だけでなく、鳥の自負心までも喩えている。まさに古くからの謂われにより、どんなに高く、遠くまで（鳥の名でもある「雲」まで）飛んでいっても夜になると地面近くの寝床か巣に飛び降りるのがきまりだ。人の運命や生活様式のメタファー、隠喩法であり、隠喩的な言い回しになっている。

以上、数種の狂歌の分析を手短に述べたが、このジャンルには様々な深い意味をもつ作品が少なくない。色々な技法の働きのお蔭で、虫たち、各鳥類の性質と性格、生態だけでなく、それらの巧みに擬人化した描写によって人間関係、生活問題までも考えさせられる。

通説では、狂歌とは滑稽を詠んだ卑俗な短歌と言われているが、私の考えでは、このジャンルの作品は本当にもっと高いレベルのもので、引用した『絵本』もこの観点から絶賛されるだけの価値があると思う（詳しく⁶を参照）。

次に、古典の『歌合せ』全体をもじった『狂歌合わせ』の話から『小倉百人一首』の全首につき替え歌を創作した狂歌集（『蜀山先生狂歌百人一首』（1843）⁷と『もじり百人一首』（2005）⁸）の中からのパロディーの分析に移ろう。

『蜀山先生狂歌百人一首』について、インターネットにあるものを引用しよう。「小倉百人一首の全首につき替歌（パロディー）を創作した狂歌集です。〈中略〉1843〈年〉、（その題で）大阪で出版されました。蜀山先生とは大田南畝（1749-1823）。それ以前にも狂歌師による同種の試みは幽双庵『犬百人一首』をはじめ幾つもありましたが、江戸狂歌の大家の名で出版された本書は最も著名な『もじり百人一首』として今日まで享受されてきました」と⁹。

「百首すべてを蜀山人の自作とするのは疑わしいと見られています。〈中略〉蜀山人らしからぬ素人臭い作も幾つも存在するのは明らかですが、〈中略〉天明狂歌の頓知横溢の才を十分に発揮した集となっており、蜀山先生を草葉の陰で嘆かせることはなかったと信じます」と¹⁰。

本発表にはもう一つの替え歌の本を紹介いたす。篠崎辰夫の『現代のパロディーもじり百人一首』だ。そのはじめに次のように書いてある。「古典なんかわからない、ましてや和歌なんてとんでもない・・・そんな方多いのではないのでしょうか。私自身もずっととんでもない方でしたが、どういうわけか今になって古典に興味が出てきました。しかし、なんとともつつきづらい。もっと身近に親しめないものか・・・」

そこで、原作をもじったパロディーを作り、それを切り口にして百人一首の世界に足を踏み入れてみよう、と、とんでもないことを思い立った次第。」と¹¹。

下記（以下）幾つかの『小倉百人一首』の原作の首は、蜀山の『狂歌百人一首』と篠崎辰夫の『現代のパロディーもじり百人一首』からの首と比較してみよう。

天智天皇	蜀山	篠崎
一 秋の田の かりほの庵の 苔(とま)をあらみ わが衣手は 露にぬれつつ	秋の田の かりほの庵の 歌がるた とりぞこなって 雪はふりつつ	あきれたの 秘書の給与に 目がくらみ 彼(か)の騙し手は ついにしれつつ

原作には秋の野の小屋で、夜を過ごす農夫のさびしく、つらい心情が描写されているが、蜀山のもじりには歌人(天智天皇)の趣味(歌カルタ)を強調してそれに注目されているかのような印象も持つが、実際は蜀山先生が歌カルタの遊びにある場面を取り上げているかもしれない。一つの首の上の句と違うもう一首の下の句(取り札)を間違えることもめったにないことだと示唆していると思う。一番の下の句「露に濡れつつ」と光孝天皇(15番)の「君がため 春の野にいでて 若菜つむ 我が衣手に 雪はふりつつ」の「露に」と「雪は」どうしても間違いやすい。このような間違いは両方に「我が衣手」との句も入っているので次は「露」か「雪」を無意識に使われる機会が起こりがちではないかと私には思える。

私自分自身も『百人一首』のいくつかの歌をほとんど丸暗記した。文語体の授業の中だけでなく色々な場面でも(「日本の秋フェスティヴァール」を開会するときとか)その朗読のも大好き。たまに大江千里(23番)の「月見れば ちぢに物こそかなしけれ わが身ひとつの 秋にはあらねど」の下の句と良ぜん法師(70番)「さびしさに 宿をたちいでて ながむれば いづくもおなじ 秋の夕暮れ」の下の句とどうしたかの理由で突然に間違っている。このような場合には両方にはほとんどなにも(似ている上の句か下の句の一行でも)ない。両方にある“秋”というキーワードだけが同じだ。両首の深い内容か秋の悲しい気持ちかが間違いの原因になっていないかと思う。

もじり歌(あきれたの。。。)に戻ろう。篠崎の解説によると『「政治とカネ」をめぐる、多くの議員が辞職に追い込まれている。このほかにも、このようなあきれた事件があとを絶たない。』と¹²。このようなもじり歌はとても現代的で、不正な政治家を批判する痛烈な風刺ではないか。

柿本人麻呂

(「人丸」と書いて「ひとまる」ともいう)

三 あし引きの 山鳥の尾の しだり尾の 長々し夜を 独りかも寝ん	あし引きの 山鳥の尾の しだりがほ 人丸ばかり 歌よみでなし	また軒 先を越されて 眠られず ながながし夜を ひとり悶々
----------------------------------------------	--------------------------------------------	-------------------------------------------

人麻呂の一首には片恋か失恋に近い心持や感情が反映されていないかと思う。蜀山の狂歌は原作の上の句の二行の繰り返しになることが明らかだ。その内容は全くちがう。人丸本人の個性を描写しているらしい。「和歌の神様にさえ、いや和歌の神様だからこそ憎まれ口を叩かずにいられない臍曲がり」とのこの首の歌意の解説もある¹³。

篠崎は原作の下の句の一行(ながながし夜を)だけをヒントとして残したが、そ

のもじり歌は生き生きしたユーモアのある一首だと信じる。歌人自身はその歌の意味を次のように説明している。「団体旅行は、人より早く寝るに限る。遅れをとると、人のいびきで、朝まで眠られず・・・ということになる。」と¹⁴。

猿丸大夫

五	奥山に もみじふみわけ なく鹿の 声聞くとときぞ 秋はかなしき	なく鹿の 声聞くたびに 涙ぐみ さる丸太夫 いかい愁たん	奥さんが 機嫌そこねて 里帰り ひとりさびしく 寝るはかなしき
---	---------------------------------------------	------------------------------------------	---------------------------------------------

原作の場合、奥山に鹿の鳴き声によって、一層深く心にひびいてくる秋の情感が感じられるが、蜀山の歌人の気持ちが強調されていて、篠崎は秋の寂しさを強調しながら風俗画のようなもじり歌を作成した。

蟬丸

十	これやこの 行くも帰るも わかれては しるもしらぬも 逢坂の関	四の緒の ことをばいはず せみ丸の お歌の中に もの字四ところ	だれもかも 老いも若きも パソコンで 知るも知らぬも インターネット
---	---------------------------------------------	---------------------------------------------	------------------------------------------------

原作の蟬丸の短歌の意は「これがまあ、東国へゆく人も、都へ帰ってくる人も、別れては、ふたたび逢い、たがいに知っている人も、知らない人も、ここで逢うという〈中略〉その逢坂の関であるよ」と解釈されている¹⁵。

篠崎の替え歌には「四つの緒のこと」は琵琶のこと。蟬丸は琵琶の名手と伝わる。その歌の中では「を（緒）」を言わず、「も」ばかり四カ所もある、と強調されている。

篠崎のもじり歌の内容は原作の意と無関係だが、「も」の字も四カ所。内容はとても近代的で「あなたはインターネットを、ほんとうは、ようわからんのに、わかったようなふりをしてみませんか」以前こんなテレビのCMが流れていた。それもこのもじり歌にヒントとなったと篠崎が書いている¹⁶。

参議篁

十一	わたの原 八十島かけて こぎいでぬと 人には告げよ あまのつり舟	ここまでは 漕ぎ出でけれど ことづてを 一寸たのみたい 海士の釣舟	ノンキャリの 出世をかけた 裏金を 人には隠せ 官僚のウソ
----	----------------------------------------------	-----------------------------------------------	-------------------------------------------

『小倉百人一首』の十一番の歌は「流罪のために、隠岐への舟旅に出たことを、恋しい都の人に伝えたいという孤独感と思慕の情」¹⁷を詠んでいる。

蜀山の狂歌は原作によく似ている。悪くない替え歌ではないだろうか。遠く離れたところにいる恋人同士の片恋に近い愛情と慈しみが巧みに表現されていると思う。

両方の原作と蜀山の首には「告げよ」と「ことづてを一寸たのみたい」と呼びかける対象は「あまの釣り舟」だ。それを擬人化した和歌で巧みな言い回しになるのではないか。

篠崎の句にはモダンな社会の差し迫った問題が取り上げられているとすることができる。この一首には原作のヒントもない。篠崎のもじり歌は参議の短歌と全く関係がないらしく、官僚の体質が明らかされた、いわゆる政治的風刺に溢れた詩文といってもいい。篠崎の多くのもじり歌は今を語っているが、数世代後の人々にとって「今は昔」のような詩文になるだろう。将来の人間の観点から今のパロディーも一種の「古典の歌」になるかもしれない。それにもかかわらず現在によく受け取っている洒落と物笑いの種が分からなくなる恐れもある。数十年たったら、上に挙げた「だれもかも 老いも若きも パソコンで 知るも知らぬも インターネット」とのもじり歌の意味もその時代の人々が説明なし全然分からなくなるだろう。その場合、どんな解釈になるか予言できないけれども、たとえば「ふた昔、世界の人類がITの時代に入ったころPCもインターネットもまだ利用できなかった人もいた」との説明も将来の人たちはこれを聞いて、彼らにとって驚くほどばかりの情報になるだろう。

だれでも分かっているように歌、短歌（狂歌、もじり歌も例外ではない）—短歌全体は時の流れとともに変わっていくのだ。上述の例もみんなこの事実を明らかに裏付けるのではないだろうか。

以上、手っ取り早い狂歌の分析から皆様がお分かりになっているように、狂歌というジャンルで作られた詩文には様々な深い意味をもつ作品が少なくない。色々な技法（擬人化—主に『百千鳥』や『虫選』；隠喩法、皮肉、風刺、ユーモア、滑稽）の働きのお陰で、鳥たち、虫たちの性質と性格、生態だけでなく、それらの巧みに擬人化した描写によって人間関係、生活問題までも考えさせられる。

繰り返しになるかもしれないが、通説では狂歌とは滑稽を詠んだ卑俗な短歌と言われているが、私の考えでは、このジャンルの作品はもっと高いレベルのもので、『絵本』だけでなく、『狂歌百人一首』も『もじり百人一首』も私の観点から絶賛されるだけの価値があるのだ。多くの狂歌はパロディーでもある。いいパロディーを作るのもたまには原作を作ることより難しいのではないかと思う。

私自身自身も一度パロディーの形でエッセイを書くのも試みた。それは「流れの早い川、青川で泳ぐ赤鬼—日本人の名前は何を語っているか」¹⁸というもの。2004年、日文研にいたとき、それを日本語で作成した。よく出来たかどうか自分で判断できないが、聞いた評判によるとあまり悪くないエッセイだそう。その中に当時の日文研の所長山折先生をはじめとするスタッフ（掃除婦の人、「赤おに」の食堂の Cock 青川くんまで）の多くの人の名前と性質、性格を描いた。優しいパロディーになったと信じておる。その中に日文研の海外研究交流室の素晴らしい女性たち（奥野様、佐々木様、竹谷様）に因んで短歌（狂歌に似ているかも）を作って、自分の研究テーマ（『百千鳥狂歌合はせ』）のヒントも入れた。

竹谷の
奥の野に出でて
小竹（ささき）見ゆ
百千鳥鳴く
珍しきかな

2005年の篠崎の『もじり百人一首』だけを読むと、狂歌のジャンルが今でも人気があって、その伝統も守られていることも分かることができる。

篠崎が『もじり百人一首』のはじめに次のウィットを表現する。「古くから日本人に愛されている名歌を、このようにもじることについては、いささか気がひけました。原作を冒瀆するものと非難されるかもしれませんが、百人一首をより身近に感じ、親しみを増す裏返しの表現としてご容赦頂きたいと思います。あくまで遊び心から生まれたもので、百人一首を身近に感じて親しんで頂ければ幸いです。」と¹⁹。

これだけを考慮して、狂歌はどれほど大事な役割を果たすことが出来るかがお分かりになるだろう。もじり歌を通じて古典があんまり知らない人もそれを親しく感じるチャンスが与えられないか。

狂歌とパロディーのテーマは日本文学史の講座をとっている学生にも教えなければならぬと私は信じている。日本の文学の普遍性と特徴ももっと深くまで理解できるからだ。パロディーとユーモアは国民性と切っても切れない、密接な関係にある。

たとえば、比較すると、ロシアにはパロディーを冗談に作る習慣もあるが、時々（日本には優れた古典の作品をまねてパロディーを作る習慣があって、ロシアのパロディーには日本のパロディーの正反対のものでもある）誰かのあんまりよくできなかった作品か作者を笑いものにする 것도 少なくないわけだ。

本発表を準備したとき、一つのアイディア、提案も心に浮かんだ。日本、中国、韓国、東南アジア諸国などの国々のパロディーをテーマにした日文研のシンポジウムか学会を実現できればいいのではないかと思いついたのだ。

注・文献

- 1 『広辞苑』編者新村出、岩波書店、昭和55年、565頁。
- 2 福田和彦『歌麿』（浮世絵名品撰）ベストセラーズ、1992年、182頁。
- 3 同書、134頁。
- 4 下村良之介、安村敏伸、林美一、稲賀繁美共著『歌麿』新潮社、1991年、60頁。
- 5 同書、60-61頁。
- 6 リビン（ルービン）V. V. 『知られざる歌麿—「百千鳥狂歌合はせ」の詩的、文法的分析』国際日本文化研究センター、2004年、頁18-34参照。
- 7 <http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-ymst/yamatouta/sennin/kyoka100i.html>
- 8 篠崎辰夫『もじり百人一首』（上）、株式会社まぐまぐ、2005年。
- 9 （7）と同書、1頁。
- 10 同書、同頁。
- 11 （8）と同書、4頁。
- 12 同書、9頁。
- 13 （7）と同書、2頁。
- 14 （8）と同書、12頁。
- 15 三木幸信、中川浩文『評解小倉百人一首』（新修版）、京都書房、1983年、10頁。
- 16 （8）と同書、21頁。

17 (15) と同書、11頁。

18 ルイービンV. V. 『流れの早い川、青川で泳ぐ赤おに一日本人の人名は何を語っているか』、「日文研」32号、平成16年、14-25頁。

19 (8) と同書、3頁。